

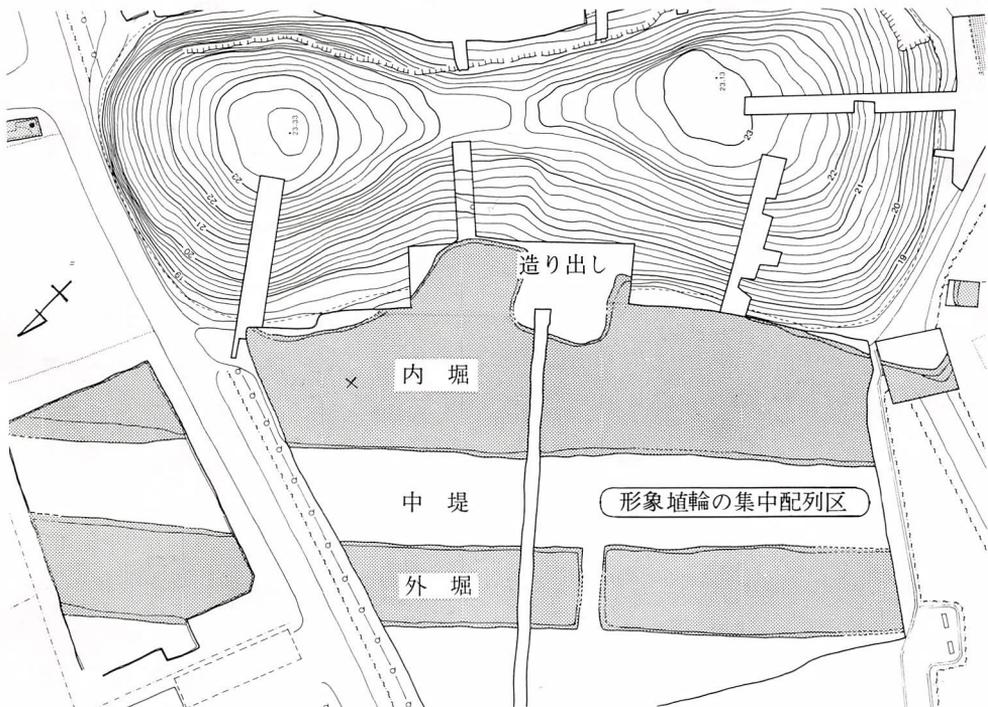
# 造り出し出土の供献土器について

若松良一

## I はじめに

埼玉古墳群中の前方後円墳である瓦塚古墳は現存長67.0mの中型前方後円墳である。さきたま資料館から、わずか100mの位置にあり、西側が芝地として整備されていることから、前方後円墳特有の美しい側面観を一望でき、見学者の最も多い古墳の一つである。平成元年度には、付近に休憩舎も完成し、今後ますます児童・生徒をはじめとする見学者にとって親しみ深い古墳となろう。

ところで、瓦塚古墳は、かつて東側の墳丘部分が土取りされたために、断崖状となっている部分があり、このまま放置すれば墳丘の崩落を招く心配があった。このため、埼玉県は文化庁と協議のうえ、国庫補助を受けて昭和63年度より、国指定史跡瓦塚古墳保存修理事業を開始することに決定した。初年度は墳丘東側部分の盛土修景工事が実施され、東側からの景観は、建造当初の姿がしのばれる整美なものとなった。平成元年度は墳丘の西半分と東側内堀の保存修理を対象としているが、確認調査の結果、造り出し部が明確に把握され、その直上と周囲の堀内から、まとまった量の須恵器と土師器が出土した。このうち、須恵器器台をはじめとする数点を、考古常設展示の充実のため



第1図 瓦塚古墳測量図 (1:500)

に復元し、実測図の作製と写真撮影を実施した。これらは瓦塚古墳の築造年代を知る手がかりとなりうるものであり、特に器台は県内での類例の少ないものである。今後の瓦塚古墳の保存整備とそれを支える研究の上で有意義と考え、調査研究報告において公表し、若干の検討を行うことにした。

## 2 造り出し出土の供献土器

瓦塚古墳からは多種かつ多量の土器が出土しているが、そのほとんどが、造り出しと、これに接する内堀からの出土であり、これらは本来、造り出しに置かれていたものが、土砂とともに内堀内に流れ込んだものと考えてよいだろう。ここでは、今回、常設展示充実の目的で復元した須恵器器台1点、土師器杯2点、須恵器高杯2点について、実測図を掲げ、資料紹介したい。また、過去に報告されたものも、造り出し供献土器群の器種の組合せや、量、編年等を考える上で重要なので、参考にしたい。

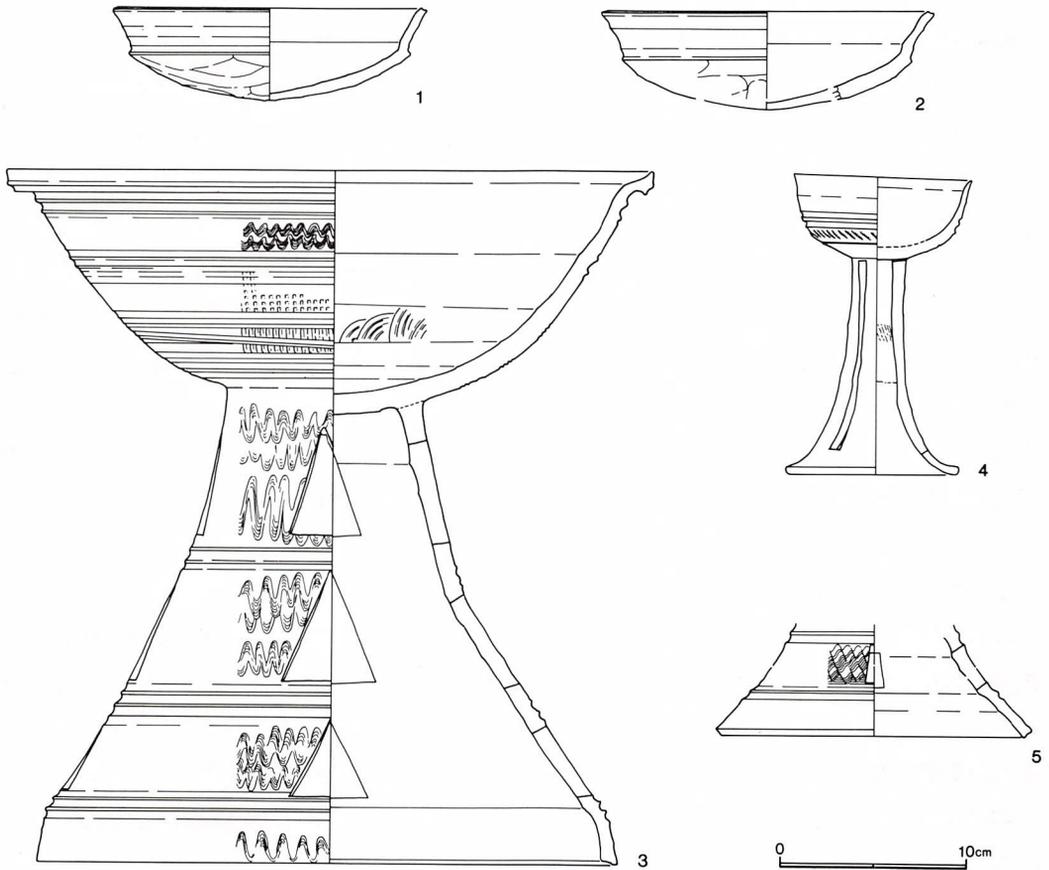
### 須恵器器台（第2図3）

残存率は30%程度であるが、全ての部位の破片がそろっているため、完全復原が可能であった。出土状態は、原位置から、まとめて出土したわけではなく、平成元年度に調査した造り出し上面のF区に散乱していたものが接合し、さらに、周堀内にあたるB区、1T下半出土の破片とも接合している。また、昭和57年度に内堀から出土した破片（第四集第41図281～283）も接合している。

器種は高杯形器台と呼ばれるもので、復原高36.3cm、復原口径34.8cm、復原脚部径31.2cmを計る。杯部は半球形を呈するが、口縁部を外方に屈曲させ、端面を上下両方向に拡張している。特に下端部は段をもち、鋭い凸帯状になっている。文様帯は口縁部直下であり、3条一組の凹線によって作り出された2条の凸帯にはさまれた部分に櫛描波状文2段を巡している。波状文の施し方は、リズムカルで乱れもなく、丁寧である。体部はロクロ目によって調整されているが、一部に平行叩き目が残存している。この叩き目は、底部外面にもあり、脚部とは別体成形であったことが明らかである。内面はヨコナデ調整が行われているが、一部に、同心円状の当て具痕が残存している。尚、底部内面の直径10cm程の範囲が平滑になっており、甕の底部が擦れた痕跡とみられる。

脚部は、円錐状で、下方に行くに従って外反の度合を強め、端部が垂直に立ち上がる。3条一組の凹線を巡らすことによって作り出された2条の凸帯をもって3段に区画され、文様帯としている。第1段には2段の櫛描波状文が巡り、第1段より幅の広い第2、第3段には3段の波状文が巡る。波状文の施し方は、振幅が大きく、乱れが認められ、波状文同志の切り合いがあるなど、粗雑な感じを受ける。脚端部にも1段の波状文を巡すが、施文が弱く、スピードが感じられない。また、下端に寄っており、はみ出していることから、倒立して施文したと考えてよいだろう。透し孔は、鋭利な刃物によって三角形に穿孔されており、直列式に四方向に配置されている。脚部の内面は横位のナデ調整によって、粘土紐巻き上げ痕は完全に消されている。脚部の端面は段をもち、倒立して、ヨコナデ調整を行っている。

胎土は良好だが、白色の粗砂を少量含み、器表がザラ付く感じがする。焼成は普通で、瓦質の印象を受ける。内面は、暗青灰色、外面は黒色を呈し、杯部外面には黒褐色の自然袖がかかる。



第2図 瓦塚古墳出土土器実測図1 (新たな資料)

#### 須恵器無蓋高杯 (第2図4)

平成元年度調査の造り出し上にあたるF区出土の脚部片が昭和57年度内堀出土の脚部片 (第四集第41図285) 及び杯部 (同284) と接合し、完全復原が可能となった。脚部の現存率は80%、杯部は25%である。

長脚一段三方透しの無蓋高杯である。器高15.7cm、復原口径9.6cm、底径9.3cmを計る。杯部は丸底の底部と直立気味の口縁部をもつ小型のものである。口唇部はわずかに外反しており、内部が斜面となっているため鋭く尖る。口縁部と体部との境界には太い2条の凹線を巡し、その直下を文様帯としている。そこには、斜行する櫛歯刺突文が等間隔に整然と施文されている。文様帯の下には細い沈線を巡し、界線としている。

脚部は細長い柱状部が次第に外反を強めて裾部に移行する。端部はやや肥厚し、丸く収められている。脚部の外面は細かいカキメ調整の後、回転ヨコナデ調整が加えられている。内部は、裾部のヨコナデ調整は丁寧であるが、脚柱部には粘土紐の接合痕や、細かいシボリ目が観察される。透し孔は鋭利な刃物で一切に穿孔されており、三方向に開くが、その間隔は等しくない。幅5mm前後の細長い長方形透しで、裾部から、杯部との接合面にまで達している。

胎土中に白色の粗砂を少量含む。焼成は良好で器膚も整っている。内外面は青灰色、器肉はセピア色を呈する。

### 須恵器高杯脚部（第2図5）

同一個体であることが明かな小片2個からの復原実測である。脚裾部は平成元年度調査の造り出し上C区の出土、透孔の部分は昭和61年度調査の東側内堀出土（第7集第37図201）である。復原底径は17.0cmあり、小型の器台や脚付壺の可能性も検討したが、類例は少なく、有蓋高杯の脚部と推定するに至った。わずかに外反して開く器形で、端部は四角く仕上げられている。外面には2条の凹線によって作り出された凸帯間に文様帯があり、カキメ調整の後に均整のとれた波状文が施されている。透孔は、小さな台形と推定されるが、何方向になるのかはわからない。現存部上端の状態から、このまま杯部に付くとは思われず、短脚二段透しの脚部となる該然性が高い。

胎土は精良で、白色微粒と雲母微粒が微かに認められる。焼成は良好にして堅緻。青灰色を呈し、外面は降灰により光沢を帯びる。

### 土師器杯（第2図1）

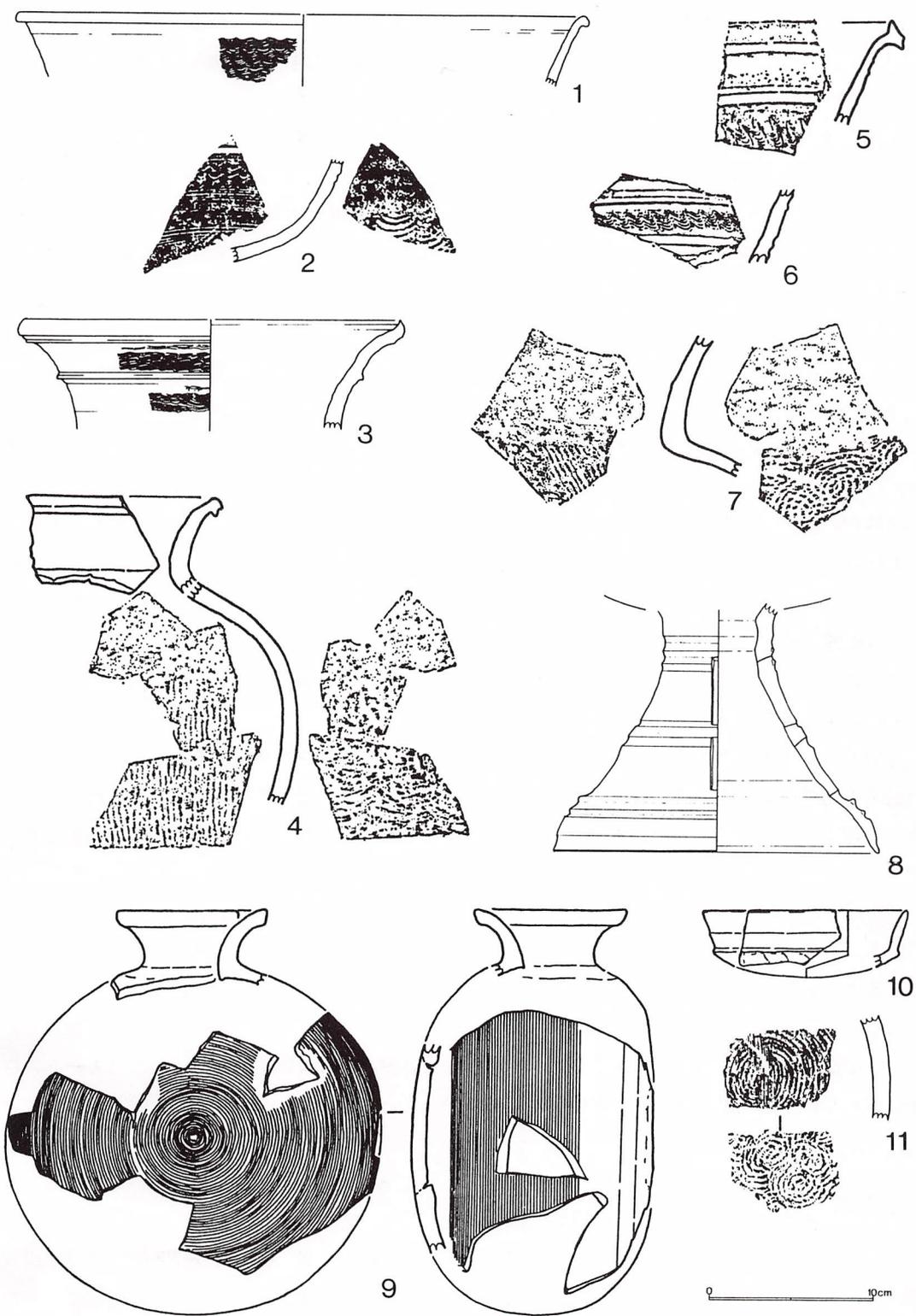
平成元年度調査のC区出土。造り出しの西側の付け根にあたるコーナー部下場から、まとまって出土した。残存率は50%強である。いわゆる模倣杯であるが、口径が17cmと大型品である。体部と口縁部の境界には明瞭な段をもっている。口縁部は、わずかに外反しながら開く。端面は、平坦に仕上げられているが、わずかに凹線が認められる。体部外面は全面手持ちヘラ削り、口縁部内外面はヨコナデ調整を施す。体部内面にブラシ状の工具の当たった痕が残っている。製作が丁寧で、器膚も良く整っている。胎土は土師器としては極めて精良である。礫を含まず雲母・角閃石の細かいものが観察される。焼成は良好で、乳白色に近い淡褐色を呈し、黒斑を伴う。

### 土師器杯（第2図2）

第2図1と共に、造り出し西側コーナー部より出土した。小片からの復原実測であるが、口径は18cm位になろう。器形は第2図1に類するが、厚手に作られている。口縁部端面には、浅い凹線が巡る。調整法のほか、胎土、焼成の面でも共通性が認められる。外面は乳白色、内面は淡褐色を呈する。

## その他の土器

既報告の資料として、須恵器器台1、須恵器大型甕1、須恵器中型甕2、須恵器脚付壺1、須恵器提瓶1、須恵器横瓶1、土師器杯1があり、第3図に再録した。1と2は器台の同一個体片である。口縁部直下と体部に文様帯があり、振幅が小さく、細かい波状文が丁寧に施文されている。口縁部が丸く仕上げられている点や器肉の薄い点で、今回報告した器台と異なり、焼成もよい。昭和61年の調査で後円部東側に設けた4Tから出土した。3は中型甕の口縁部で復原口径24.0cmを計る。断面三角形の貼り付け凸帯の上下には細かく振幅の小さい波状文が巡る。東側くびれ部から出土した。4は外面の全面に淡黄色の釉を被った美しい甕で、復原口径24.0cmを計る。口縁部は短く外反し、無文である。昭和57年度の調査で造り出し南西側の内堀から出土した。5～7は大甕口縁部の同一個体片である。凹線によって三段に区画され、傾斜のある波状文がリズムカルに施文されている。口唇部は上下に拡張され、端面に綾が走る。復原口径は40cm。外面は黒色の自然釉を被り、焼成良好。今回造り出し付近の内堀から出土した破片が、昭和57年出土資料と接合した。8は長方形



第3図 瓦塚古墳出土土器実測図 2 (既報告の資料)

二段三方透しをもった脚部である。底径20cmを計る。高杯の脚部には類例がなく、恐らく長頸壺の脚部であろう。昭和61年に行田市教育委員会の調査した後円部北側内堀に掘り込まれた溝から出土した。9は体部径23.0cmを計る提瓶で、短い口縁部が付く。把手を伴っていた可能性が高い。昭和57年度の調査で造り出し北側の内堀から出土した。11はうず巻状のカキメの上に直線的なカキメが走ることから横瓶の端部とみなしてよいであろう。昭和61年の調査で前方部東側に設けた3Tから出土した。10は土師器模倣杯である。復原口径は12.5cmを計り、口唇部は丸く仕上げられている。やや軟質の焼き上がりで橙色を呈する。このほか既報告のものに、櫛歯刺突文を2段巡した須恵器小型甕（第7集第37図181）があり、実測図の割愛されたものとして、昭和57年度出土の長脚一段三方透しの無蓋高杯脚部片1点と粗雑な波状文をもつ大甕口縁部片がある。

平成元年度には、今回資料報告したもののほかに、須恵器小中型甕3個体、大型甕1個体、土師器埴1個体、土師器甕1個体が出土している。供献土器群全体の組合せを提示しておこう。

〈須恵器〉 器台2 無蓋高杯2 有蓋高杯1 提瓶1 横瓶1 脚付壺1 小中型甕6 大型甕3

〈土師器〉 杯3 長甕1 埴1

組成としては酒を貯蔵する器が多いのに対して、銘々器である杯類の少ないことが指摘できよう。

### 3 供献土器群の編年的位置について

瓦塚古墳の供献土器には須恵器と土師器があり、さらに各器種が存在している。これらは瓦塚古墳の造営年代を知るうえで有効な手がかりであり、既に、埼玉古墳群発掘調査報告書の第4集と第7集でも検討を加えてきたところである。まず、昭和61年3月には、第四集で、杉崎茂樹氏は、瓦塚古墳出土の長脚一段透し無蓋高杯を県内出土例と比較検討し、これに波状文を伴う甕と器台の存在を勘案して、器群をTK10型式前後と推定した。平成元年3月には、第7集中で、駒宮史朗氏は昭和61年度出土須恵器を検討した上で、MT15型式から出現する提瓶と横瓶が存在することから、上限をMT15型式の時期とし、高杯、提瓶にやや新しい傾向があるとして、下限をTK10型式とした。また、実年代は6世紀中葉を中心とする時期とした。

これらの見解は、今回出土した新たな資料が加わっても、大幅な変更を要するものではなからう。しかし、器台や高杯の全容のわかるものが得られ、土師器杯も別種のものが出土したことから、さらに厳密な編年的位置づけを行う準備が整ったといえよう。

#### 須恵器無蓋高杯の編年的位置と年代について（第4図参照）

須恵器無蓋高杯（第2図4）は、長脚一段三方透しで、杯部は小型ながら、深い器形をもっている。この種の高杯は、大阪府陶邑窯跡群では、II型式の初頭、MT15号窯に、その初源があり、TK10型式まで存続するとされている。田辺正三氏は、MT15段階で無蓋高杯が2種にわかれ、I期の無蓋高杯をうけつぐもの（A）と、杯部が小さくII期後半に一般化するもの（B）とがあると述べている。また、無蓋高杯AはI期の体部に文様体と、把手をもつ無蓋高杯の延長線上にあるが、M

T15の段階では文様をうしない、非常に浅くなる。これに対し、無蓋高杯BはⅢ期以降の杯に似たタイプの杯をもち、体部に櫛描き波状文や列点文をめぐらすとしている。しかし、その後の資料の増加で、この段階の無蓋高杯Aで波状文を伴う例のあることも明かとなっている。むしろ両者の根本的な差は、無蓋高杯Aは口縁部と底部の境界に段があり、口縁部が外反して開くのに対して、無蓋高杯Bは、段がなくつまみ出し凸帯、もしくは凹線を巡し、口縁部は外反しない点であろう。さらに脚部に注目すると、無蓋高杯Aは脚端部が立ち上がり、尖っており、その上面や側面に稜をもつか、凸帯を巡している。これに対して、無蓋高杯Bは脚端部は外反して開き、端面は丸く仕上げられる場合が多い。このような視点に立てば、瓦塚古墳出土の無蓋高杯はMT15階段に出現するB類とみてよいだろう。

まず、MT15号窯出土例と比較すれば、長脚一段三方透しである点で共通するが、瓦塚古墳例の方が、脚部が長く、柱状部も細い。杯部の器形は、底部が丸く、口縁部が外上方に開く点で共通している。しかし、瓦塚例は杯部の口径が小さく、脚裾部径とほぼ均しくなっている点で、全体のプロポーションの相違が認められる。このような特徴は、瓦塚古墳例が、MT15号窯例よりも、長脚化が進行し、縦方向へ大型化したことを示している。また、杯部の文様帯についても、MT15号窯例ではつまみ出し凸帯で区画し、波状文を施すのに対し、瓦塚古墳例では、2条1対の凹線文で区画し、斜位の櫛歯刺突文を巡している。このことから、瓦塚古墳例はMT15号窯例より新しい特徴を備えているといえよう。そこで、MT15型式に連続するTK10型式の資料との比較が必要となるが、TK10号窯出土の無蓋高杯は杯部が図示されているが、脚部の全容がわからない。この内、B類は口縁部と体部の境界に凹線を巡し、その直下に櫛歯刺突文を巡す点では瓦塚古墳例と共通するが、杯部が浅く、底部の丸みを失っている。このような杯部の扁平化はTK43型式以降さらに顕在化する特徴であり、瓦塚古墳例の方が、より古い特徴を備えているといえそうである。TK10型式については、長脚二段のものが出現し、一部に長脚一段が残るとされているが、資料が十分でない。そこで、古墳出土の資料によって、これを補おうと思う。

奈良県市尾墓山古墳例は脚部がMT15号窯例より長く、瓦塚古墳例に近い。杯部は底部に丸みをもち、深さもある点で瓦塚古墳例と共通している。市尾墓山古墳は畿内型横穴式石室の初期の例として知られ、報告者は5世紀末から6世紀初頭の築造としているが、伴出の須恵器甕の口頸部の長大化や蓋杯のたち上がりが短く、内傾する点などからみて、MT15からTK10型式への過渡期的位置にあると考えられる。この市尾墓山古墳の場合、杯部はA類とB類とがあるが、共に脚部はB類のものとなっており、この時期から、脚端部の尖る伝統的な脚部が衰退しはじめ、無蓋高杯のA類とB類との区別が難しくなる。奈良県南阿田大塚古墳でも、A類とB類の無蓋高杯が共伴しているが、やはり、A類の脚端部の立ち上がりは退化的なものとなっている。共に体部は無文であり、瓦塚古墳例より新しい要素をもっている。伴出の須恵器蓋杯の形態はTK10型式のものに似るが、口縁部に段をもっており、その直前に位置するものとみられる。

京都府芝山古墳出土例と滋賀県鴨稻荷古墳例は、小ぶりの製作であるが、杯部の形態が瓦塚古墳例に近く、口径が、脚部径とほぼ均しい点でも共通している。芝山古墳例は、凹線文で区画した文様帯内を斜位の櫛歯刺突文で飾り、鴨稻荷古墳例は、例外的な段をもち、その直下に波状文を巡し

ている。前者はMT15型式に似る須恵器蓋杯と礎を伴っており、後者はTK10に近いが口縁部に段をもつ蓋杯を伴っている。静岡県大門大塚古墳例もまた、杯部口径と脚部径のほぼ等しい例で、杯部が深く、口唇部に段をもつ点など瓦塚古墳例と最も類似性が高い。ただし文様は簡素で、つまみ出し突帯を巡すのみである。伴出の須恵器蓋杯はTK10型式に近い器形をもつが、杯身の口唇部に段をもつなど、やや古い要素が認められる。

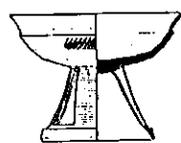
一方、脚部が細くて長い点で瓦塚古墳例と共通性をみせる岐阜県羽崎大洞3号墳出土例は、口縁部が外反することからC類とみた方がよいかもかもしれないが、杯部の扁平化が進行し、底部の丸みを失っている。また、脚端部は丸くおさめず、端面をもって仕上げられている。これらの点は瓦塚古墳例より新しい要素ではあるが、伴出の蓋杯はMT15型式の特徴を備えている。同様に脚部が長く、細い静岡県甕塚古墳例も、杯部の扁平化が認められる。伴出の須恵器礎の口頸部の長大化と蓋杯の特徴から、MT15からTK10型式の中間的位置にあるものと思われる。また、甕塚古墳では長脚二段透しの無蓋高杯も出土しているが、下段には小さい三角透しを配するものと、小さい長方形透しを配するものがあり、長脚一段から長脚二段透しへの過渡期に短期間存在するとされているものである。杯部は確実に扁平化が進行している。伴出の須恵器蓋杯は複数の時期のものが混在しており、MT15型式の特徴を備えたものと、TK10型式、TK43型式と類似するものがある。無蓋高杯はおそらくTK10型式類似のものとしてセットになろう。兵庫県西宮山古墳でも長脚一段と長脚二段透しの無蓋高杯がいっしょに出土している。長脚一段のものは、杯部が扁平ではあるものの、まだ底部に丸みを残しており、波状文を巡す点にやや古い要素が認められるが、長脚二段のものは、杯底部が完全に平底化している。脚部の透しも、甕塚古墳でみたような大小を組み合わせるものではなく、脚部中間位置に二条一組の凹線を巡し、長さを均等にするものとなっている。伴出の須恵器蓋杯はTK10型式に類似するものと、MT85号窯出土品に類似するものの2グループに分かれることから、長脚一段と長脚二段透しの無蓋高杯はそれぞれの時期と対応するものであろう。

藤ノ木古墳からも多数の無蓋高杯が出土しているが、バリエーションが認められる。木下亘氏によれば、全体的にみてTK43型式の範疇で捉えられるが、脚部に四方透しをもつ例などは古相をしめすものという<sup>註4</sup>。いずれにしても、藤ノ木古墳出土例は、小型で透しをもたないものを除けば長脚二段透しであり、体部も扁平化が進んで平底に近いものとなっている。ただし、この時期には無蓋高杯が全体に大型化する点は看過できず、精製のものには、整った波状文を巡す例や、ヘラ描列点文をもつ例が存在することにも注意しなければならない。木下氏がTK43型式の中でも新しく位置付けられるとした牧野古墳例も大型化と、長脚化が顕著な例である。TK43型式の段階では、脚端部が丸く仕上げられるものではなく、面取り状に仕上げられる例の多いことも注意される。

さて、瓦塚古墳の無蓋高杯の編年的な位置について、いくつかの資料との対比を行って来たが、ここで整理をしておこう。瓦塚古墳の無蓋高杯は田辺正三氏の分類した無蓋高杯Bにあたり、MT15型式に登場する器種とされる。ところが、瓦塚古墳例はMT15号窯出土品より長脚化が進行しており、新しく位置づけられると考えられる。それではMT15型式に連続するTK10型式の範疇で捉えられるかという点、TK10号窯出土品ではすでに、杯部の扁平化が顕在化しているため、杯部の深い瓦塚古墳例の方が古く位置づけられる。そこで、この時期の古墳出土例との比較検討を行った結果、

第4図 無蓋高杯の変遷

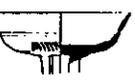
陶邑窯参考資料



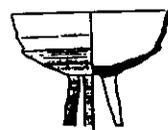
陶邑TK47



陶邑II-1



陶邑TK10



陶邑II-2



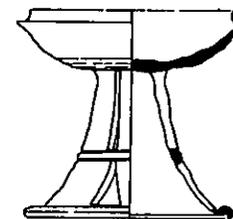
陶邑II-2



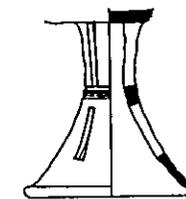
陶邑II-2



陶邑TK43



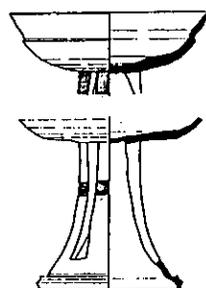
陶邑II-3



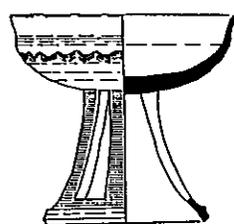
陶邑II-4



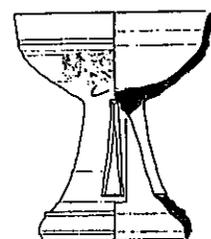
無蓋高杯A大型



陶邑MT15

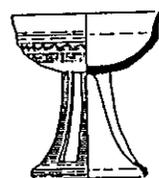


権現山2号墳



北塚原7号墳

無蓋高杯A



権現山2号墳



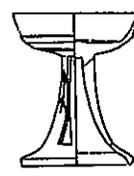
木ノ下古墳



獅子塚古墳



南阿田  
大塚山古墳



神明宮2号墳

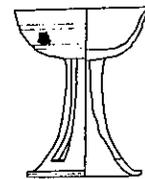
無蓋高杯B



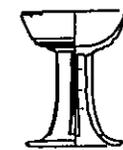
陶邑MT15



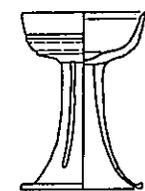
神田4号墳



市尾墓山古墳



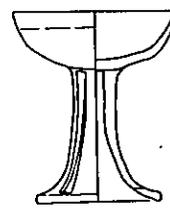
芝山古墳



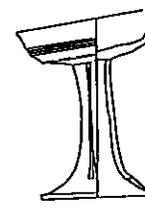
大門大塚古墳



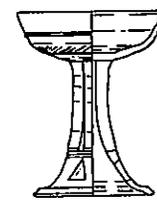
鴨稻荷古墳



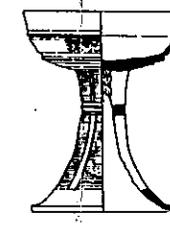
南阿田  
大塚山古墳



甕塚古墳



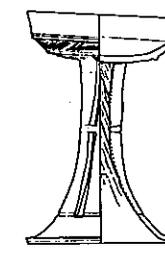
甕塚古墳



藤ノ木古墳

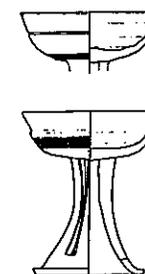


西宮山古墳

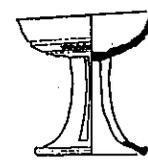


牧野古墳

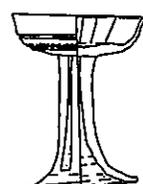
無蓋高杯C



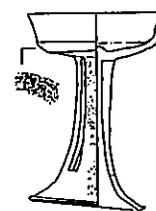
市尾墓山古墳



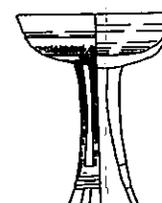
西宮山古墳



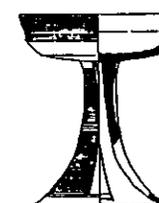
甕塚古墳



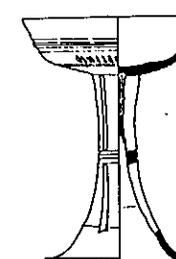
羽崎  
大洞3号墳



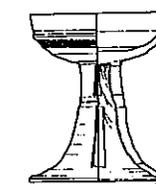
甕塚古墳



藤ノ木古墳



藤ノ木古墳



牧野古墳

最も類似性の高い芝山古墳、鴨稻荷古墳、大門大塚古墳の3例を抽出することができた。この3例のうち、芝山古墳ではMT15型式、鴨稻荷古墳と大門大塚古墳ではTK10型式に近いが、杯身の口唇部に段をもつ須恵器蓋杯を伴っている。田辺氏のMT15とTK10は連続する型式で、製作技術や器形の組み合わせに大きな変化はなく、形態の変化は漸移的であるとする立場<sup>註5</sup>に立てば、TK10型式のメルクマールは杯身の口唇部を丸く仕上げ、段をなさない点であるから、鴨稻荷古墳、大門大塚古墳はMT15型式の範疇の中で捉えるべきであり、MT15型式の時間幅の中では新しい時期に該当させることができよう。このことから、瓦塚古墳例も同様の時期に位置づけてよいことになる。

さて、瓦塚古墳出土の無蓋高杯の編年の位置を提示できたいま、その実年代を求めることは、瓦塚古墳の築造時期を知る上で、重要な課題であろう。九州の岩戸山古墳が筑紫君磐井の墓である該然性が極めて高いことは良く知られているところである。この岩戸山古墳は主体部は発掘調査されていないものの、墳丘から須恵器筒形器台と高杯形器台が出土している。これらは二型式以上にわたるとみられているが、その中の最も古いタイプの一群はMT15型式からTK10型式への過渡期に併行するものとされており、これを磐井の墓の造営時点である西暦527年前後とすれば、TK10型式のはじめを、ほぼ同じ年代とすることが可能である<sup>註6</sup>。瓦塚古墳出土の無蓋高杯もちょうどこの時期にあたっていることから、これを瓦塚古墳築造時の須恵器とみれば、瓦塚古墳は6世紀前半の築造となる可能性が高い。我々は、従来、ある程度の幅をとって、瓦塚古墳の年代を6世紀中葉としてきたが、今回提示した資料から、6世紀の第1四半期と第2四半期の交わる時期に限定することができそうであり、若干、年代を上方修正しなければならないことになる。

## 須恵器器台の特殊性について（第5～7図参照）

今回資料報告した須恵器器台を復原していて、驚いたことがある。それは脚部が短く、三段構成となった点である。現存率30%程度なので、大事をとって、4段の復原も検討したが、脚部の開く角度と、基部の直径から三段構成で誤りないと判断するに至った。このことを冒頭に述べたのは、高杯形器台は初期のものは短脚であるが、6世紀頃になると長脚化が進行するため、奇異に思えたからである。

ところで、須恵器器台は陶邑窯跡群では成立以来、I期・II期を通じて生産された器種で、その淵源は朝鮮半島にある。このため、初期のものには、伽耶地域などのものに酷似する例も存在している。器形から高杯形器台と筒形器台とに分類されるが、瓦塚古墳からは後者は出土していないので、高杯形器台にしぼって検討を行っていききたい。

まず、大阪府陶邑窯跡群ではI期の資料は比較的豊富であるが、全容の知られる物は極めて稀であり、II期に至っては、ほとんど図示できる資料のない状況である。そこで、各地の古墳出土の高杯形器台を補って、検討を加えることにしたい。I期の器台の特徴を要約すれば、杯部が大型で深く作られている点と、脚部はハの字状に開く短いもので、端部をのぞけば3段構成となるものが多い点であろう。さらに、細かくみれば、初期のものは脚部の外反度が強く、端部はさらにその度を強めている点がまず注意される。該当するものに大阪府大東市堂山古墳例（第5図1）や埼玉県熊谷市鎧塚古墳例（第5図4・5）を挙げることができる。しかしこの特徴は陶邑窯跡群の中では既

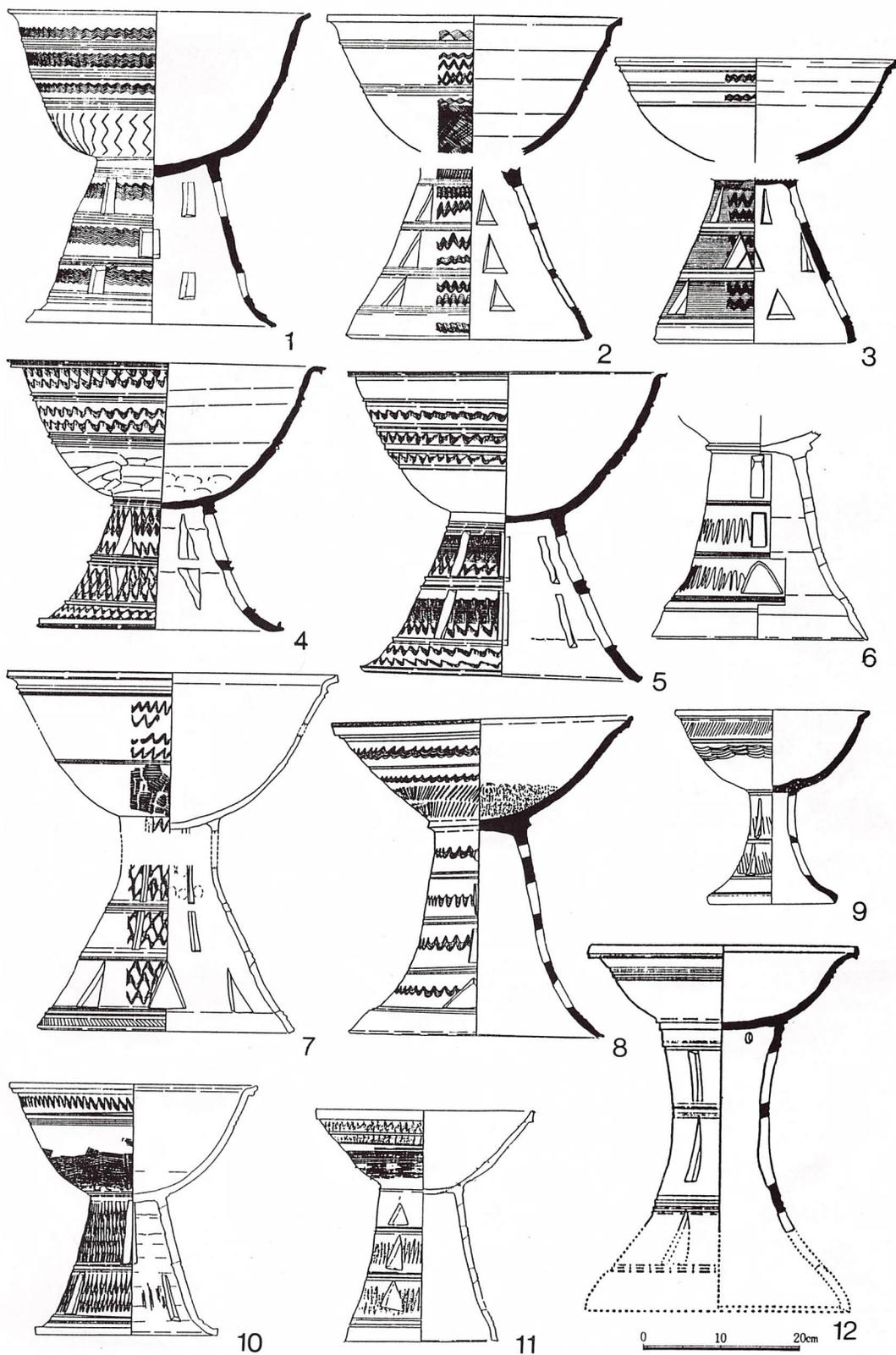
にTK208型式の段階で失われ、脚端部はわずかに屈曲して立ち上がり気味となる（第5図2）。この傾向はTK23型式では、さらに強くなる（第5図3）。また、杯部が極端に浅くなり始めるのもこの頃からである。櫛描き波状文の施文法についても、この頃から同一文様帯に二条以上の波状文を数える例はほとんどみられなくなり、波状文もやや祖雑化する<sup>註7</sup>という。さらに杯部の口唇部の複雑化も指摘されており、同期の須恵器甕の口唇部形態の影響によるものと考えられそうである。瓦塚古墳例は、脚部の形態と段構成、それに杯部の形態と口唇部の特徴、さらに波状文のあり方にわたってTK23号出土品との共通性を備えている。さらに言えば、TK23型式では、脚端部に波状文を施す例は少ないとされており、瓦塚古墳例の方がより古い特徴を備えている部分もある。

しかし、瓦塚古墳の築造年代をTK23型式まで遡らせることは不可能であり、須恵器の伝世も考えにくい。恐らく、瓦塚古墳の器台は在地窯で焼成されたもので、その窯の工人達は器台の製作を伝統的なマニュアルに基づいて行ったものと推定される。その原因については、後述するとして、しばらく、陶邑Ⅱ期に併行するとおもわれる古墳出土資料との比較検討を行ってみたい。

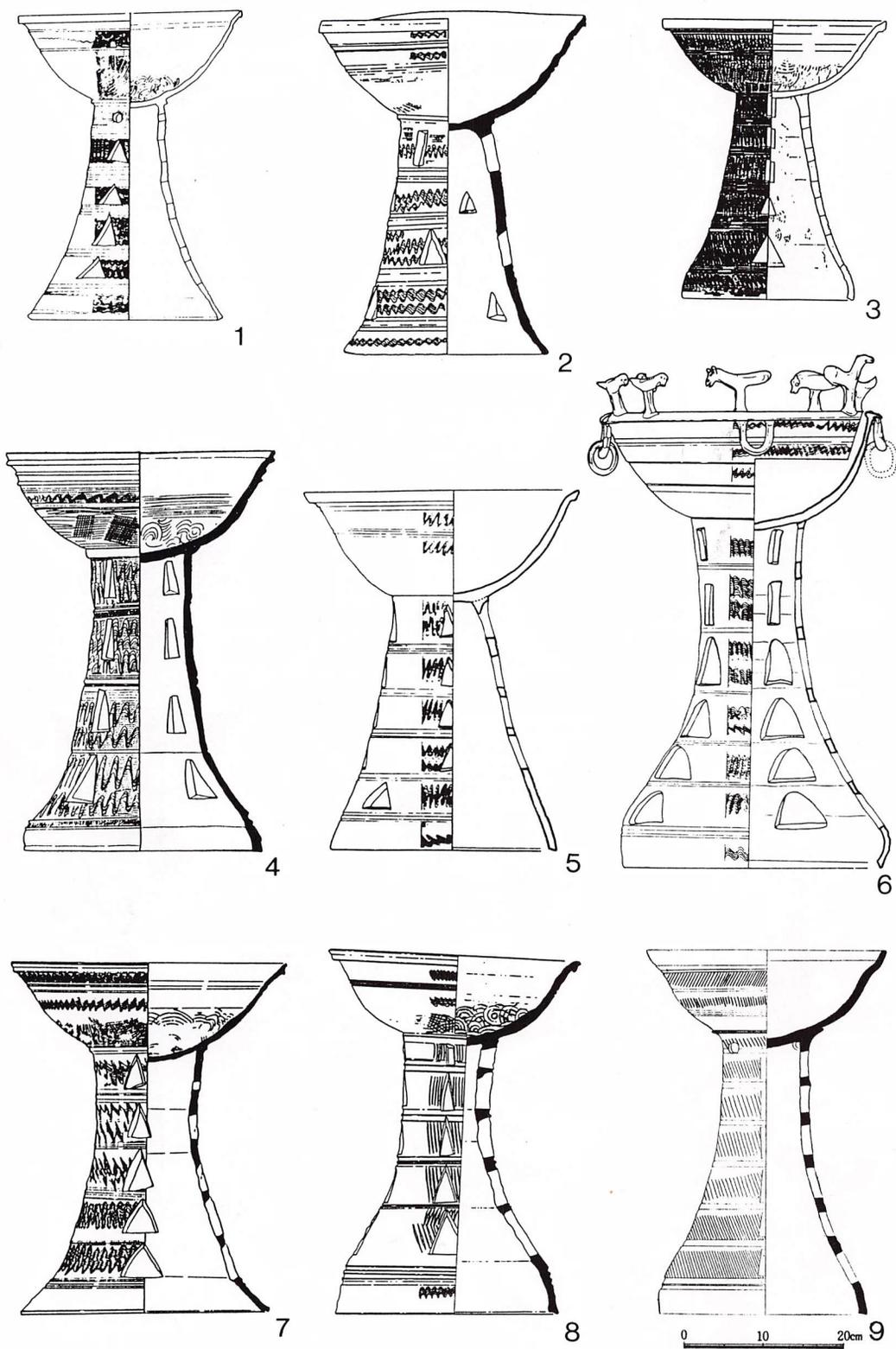
畿内及びその周辺にまず限定して資料をひろくと、第1に脚部の長大化が指摘できる。陶邑窯でみられた高杯の長脚化や甕の口頸部の長大化と同様の現像と推定され、葬祭に伴う供献土器が実用性を失い、儀器化する状況を示しているものと考えられる。具体例をあげると、MT15型式の中では新しく位置づけられる奈良県市尾墓山古墳の器台の1例（第6図1）は、脚部は端部を除いて4段構成で、さらに頸部にも小円孔をもつ補助的な段が加えられている。また、同様の時期に比定される和歌山県井辺八幡山古墳の場合、通常のもの（第6図5）は5段構成、大型装飾付の1例（第6図6）は6段構成となっている。おなじく同時期と見られる大阪府富木車塚古墳の2例（第6図4・第7図1）は4段と5段に補助的な段を加えたものとなっている。器形的には市尾墓山古墳例と井辺八幡山古墳の通常例は脚裾部の立ち上がりは認められず、特に前者は陶邑Ⅰ期前半にみられたような脚端部がそのまま外反して開く器形をもっている。一方、富木車塚古墳例と井辺八幡山古墳の装飾付の例は脚端部が著しく屈曲し、内変気味に立ち上がる特徴をもっている。このことから、MT15型式の段階では、両者が併行して行われていたことがわかる。また、脚端部においても櫛描き波状文を巡す点や、同一文様帯に2条の波状文を施す例のある点など、陶邑窯では既に失われたとされる要素が温存されている点は注意される。

地域を拡大して資料を検討すると、MT15型式併行期とみられる三重県井田川茶臼山古墳では筒形器台と高杯形器台（第7図2）が出土しており、後者の脚部は4段構成で、脚部が大きく外反する器形をもっている。また、杯部との接合部外面には市尾墓山例でみられたような凸帯が巡されている。福岡県岩戸山古墳はMT15型式からTK10型式への過渡期の資料であるが、やはり筒形器台と高杯形器台とが出土している。後者は長脚化が顕著であり、脚部が中央でくびれ、再び頸部に向けて外反する器形、つまり、中くびれの鼓形の器台を呈している。二個体内、一方（第5図12）は三段構成で、さらには、頸部に小孔を伴う補助的な段を加えており、他方（第7図3）は4段構成に補助段を加えている。

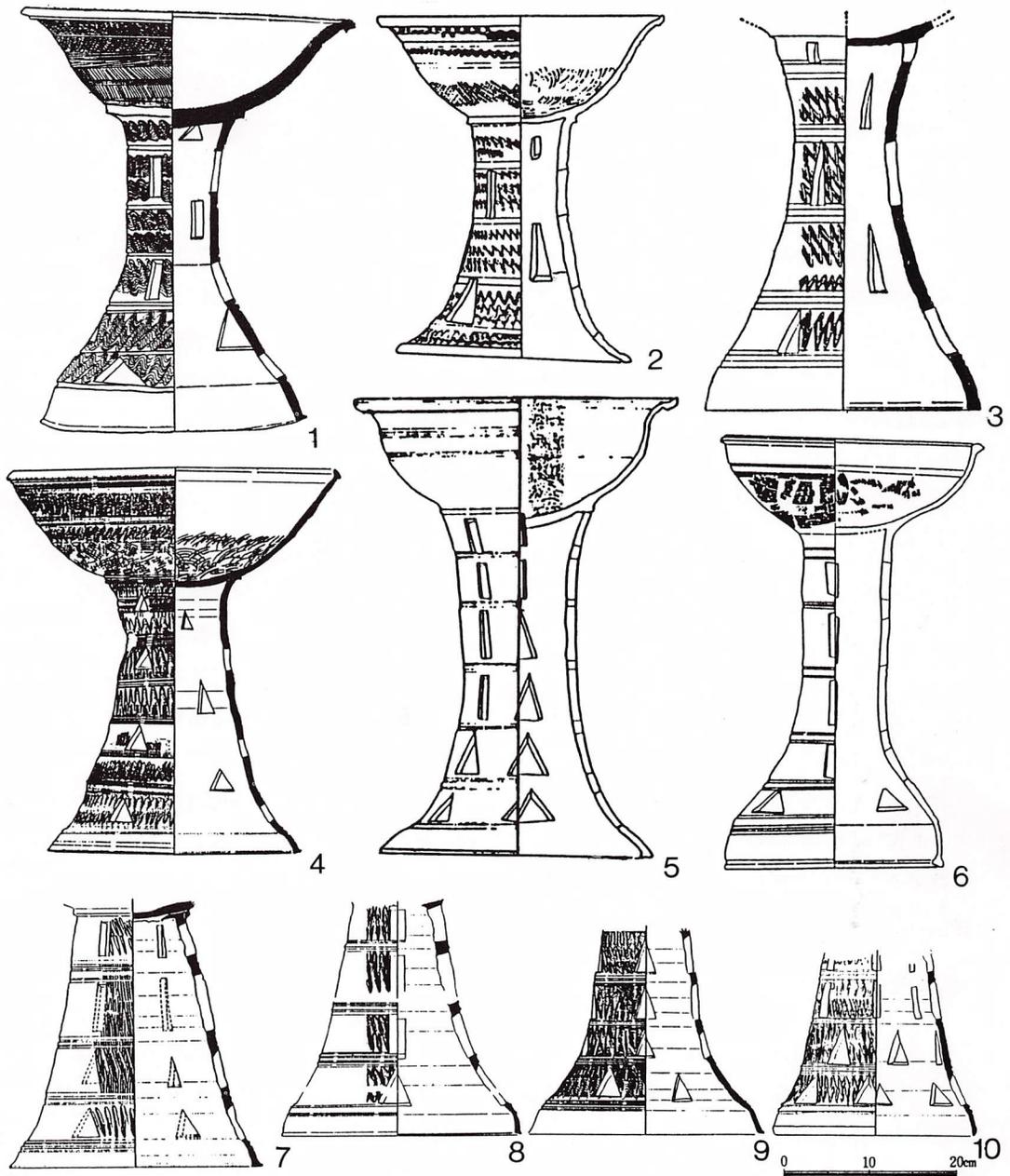
目を東国に移すと、群馬県前二子古墳では筒形器台と高杯形器台を出土しており、提瓶を伴出することからMT15型式併行とみられる。高杯形器台（第5図8）は、脚部が端部も含めて外反して開



第5图 須惠器器台实测图 1



第6图 须惠器器台实测图 2



第7図 須恵器器台実測図 3

く器台に古い特徴を残しているが、やはり長脚化は顕著で、4段構成となっている。杯部は、底部に丸みがなく、直線的に開く特徴をもち、在地化と評価して誤りないであろう。群馬県では、後足間遺跡5号住出土品（第7図7）や堀米前遺跡出土品（第7図8～10）を参考にすると、既にTK47型式併行段階で高杯形器台の長脚化が顕在化しており、いずれの資料も4段構成となっている。

以上、例をあげて、検討してきたところでは、6世紀初頭のMT15型式の段階では、畿内とその周辺は勿論、九州や関東地方の群馬県でも、高杯形器台の長脚化は確実に進行しており、その多くが4～5段構成であることをあきらかにしえた。しかし、この段階でも、小型品の中には、古い特徴

を残すものが存在していることは十分注意しておかなければならない。たとえば、奈良県寺口忍海28号墳例（第5図11）は、脚部があまり長くなっておらず、三段構成で頸部も太いといった特徴を備えている。また、静岡県大門大塚古墳例（第5図10）は短脚の二段構成の例で、端部が外反して開く点や、杯部の深い点などに、大変古い特徴が残されている。

さて、器台形土器の内、筒形器台は、この段階で確実に姿を消すが、高杯形器台はTK10型式以降TK43型式併行期まで、各地で盛んに製産されていたようである。その代表例として、TK10型式併行段階では、兵庫県西宮山古墳（第6図8）、滋賀県瓢箪塚古墳（第7図4）、同県山津照神社古墳、香川県王墓山古墳（第7図5）を、MT85窯併行段階では愛知県岩津1号墳（第7図6）を、TK43型式併行段階では奈良県二塚古墳（第6図9）などをあげることができる。この段階の高杯形器台の特徴を要約すれば、まず第一に、長脚化がさらに進行し、脚部も、端部を含めて外反して開くものが払拭され、端部が屈曲してから立ち上がるものに統一されること、第二に、杯部の口縁部がゆるやかに外反して、水平に大きく張り出すものが増加する点が指摘できる。長脚化の点については、大和二塚古墳、王墓山古墳、岩津1号墳などの例はその極みにあり、5～6段構成のものも登場している。文様についても、筒略化と祖雑化が目立ち、西宮山古墳では櫛描き波状文とへら描き斜線文が共存しているが、後者の方が卓越している。より新しい大和二塚古墳では櫛描波状文の使用例はさらに減少し、櫛齒刺突文やへら描き波状文の多様性が認められる。王墓古墳や岩津1号墳例にいたっては、段を区画する凹線を除けば、無文という状況になっている。

今まで、高杯形器台の登場から消滅までの全期間を通じての変遷を垣間みてきたが、その中にあって、瓦塚古墳出土の器台は伴出の高杯の年代の検討に照して、大変古い特徴を備えており、特異な存在であることが知られた。このことは、むしろ、瓦塚古墳の須恵器の系統を知る上では、重要な特徴と思われるので、次章において、さらに検討を加えることにしたい。

#### さきたま 埼玉型の土師器杯について（第8図参照）

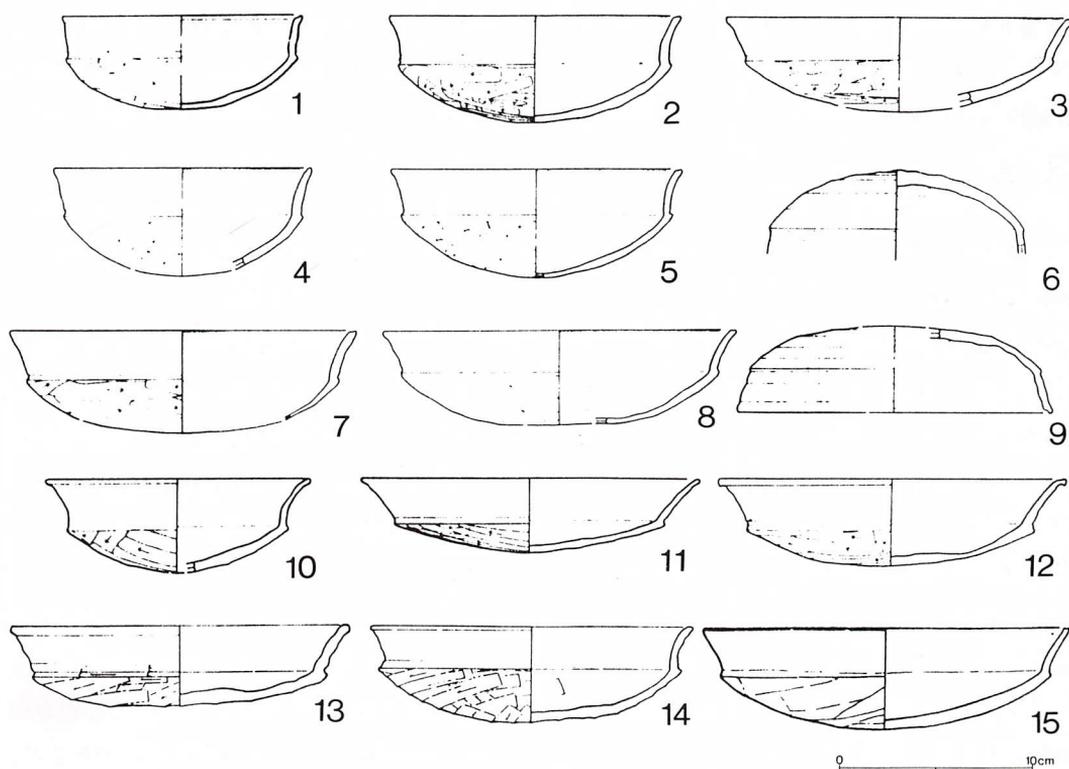
平成元年度の調査で瓦塚古墳の造り出し部直下で出土し、今回報告した土師器杯2点は、胎土が極めて精選され、焼成もよく、淡い色調で精製の土器であり、器表が滑らかな点や大ぶりの製作である点など目立った特徴を有している。この種の土師器杯は埼玉古墳群の東方2kmに位置する小針遺跡からの多量の出土が知られている。小針の大集落は、埼玉古墳群の形成された時代に営まれた集落であり、その位置からみて、両者の有機的関連は想像に難くない。それを具体的に示すかのように、埼玉古墳群では同種の土師器杯が瓦塚古墳のほか、埼玉5号墳や鉄砲山古墳でも出土をみている。この精製の杯については、まだ、その分布や発生から消滅までの編年など明らかにすべき課題が残されているが、特定の名称は与えられていない。現在のところ、その分布は、鴻巣市の生田塚第1号墳の出土例を除けば、小針遺跡と埼玉古墳群内に限定されていることから、便宜的に埼玉型の杯と呼称することを許されたい。

さて、埼玉型の杯は、小針遺跡の調査と報告を担当された斎藤国雄氏によって、型式分類と編年が試られている。これを要約すれば、TK47型式併行の須恵器杯蓋を出土した第20号住居址では胎土中に砂粒を含み、赤褐色を呈する通常の模倣杯で、口縁部の直立するものが出土している。しかし、

第10号住居址では、これとは全く胎土が異なり精製の土師器杯が登場し、この段階では小型で口縁部の直立するものと、大型で口縁部の開き方の大きいものとが共伴している。そして、これに連続する第6号住居址では口縁部の直立する杯は消滅し、すべて外反口縁の杯に統一され、後出の第2号住居址では、口縁部が長くなり、外反の度合を強め、逆に体部は浅くなるという形態変化を遂げる。また、第6号住居址で、MT15型式に類似する須恵器杯蓋が伴出したことなどを参考に、その実年代を6世紀中葉から末葉頃とするものである。

ここで、第6号住居址出土の一括資料について検討してみると、埼玉型杯は口径14~15cm程度の通常の大きさのものと、16cmを超える大型のものが混在しており、器形にも相違のあることが指摘できよう。それは、通常のサイズのもの、底部が深く、口縁部の開きが小さいのに対して、大型品は相対的に底部が浅く口縁部の外反度<sup>註10</sup>が強いという事実である。これらは、いずれも口唇部の上面か内側に浅い凹線を巡しており、須恵器の杯蓋を模倣したものであることが容易に想像される。

そこで、模倣の対象となった須恵器について思いを巡らせると、伴出の2点の須恵器杯蓋が大きな鍵をにぎっているのではないかとと思われるのである。それは、小型の蓋の約14cm、大型の蓋の推定口径16.4cmが、大別した埼玉型杯の普通・大型の二者と法量的に対応しており、さらに器形の点でも対応関係の認められる点である。蛇足ではあるが、杯身を伴わない出土状態からみて、恐らく2点の須恵器杯蓋は埼玉型の杯と混用されて、全く同じ機能の食器として用いられていたのではないかとと思われるのである。これらの須恵器は全体の器形、天井部と口縁部との境界の稜のあり方、



第8図 埼玉型土師器杯実測図（2・6・9は伴出の参考土器） 1~3 小針10号住居址 4~9 小針6号住居址 10~12 小針2号住居址 13・14 生出塚1号墳 15 埼玉5号墳

口唇部の段、天井部の回転ヘラ削りなどの特徴から、MT15型式と併行するものとみてよいであろうが、大型のものについてはMT15号窯での平均的なサイズ（14.4cm前後）をかなり上まわっていることは十分注意しておく必要がある。

瓦塚古墳出土の埼玉型杯は、同じ埼玉古墳群内の埼玉5号墳のものと器形の上では良く似ている。また口唇部を四角く仕上げ、上面に浅い凹線を巡す点も共通している。法量の上では、埼玉5号墳例が口径18.8cmと大きく、瓦塚例は1が17cm、2が推定18cmでやや小さい。しかし、小針6号住居址出土土器の検討で2分類した中では、いずれも大型杯となる。その編年の位置を小針遺跡との関係で求めるならば、口縁部が比較的短く、外反度が強くないことから、第6号住居址及び、第10号住居址の一部と対応しており、埼玉型杯としては初期のものとしていいだろう。また、実年代を検討する上ではMT15型式併行とした須恵器を参考にしてよからう。この点では、無蓋高杯の編年との関係で矛盾をきたさないからである。

## 4 供献土器群の系譜について

瓦塚古墳の供献土器はいったいどこで焼かれたのか、これが最も重要な課題でありながら、一筋縄ではいかない。なぜなら未知の窯で焼かれた可能性が高いからである。昨年度刊行の『埼玉古墳群発掘調査報告書』第7集の別冊には、埼玉古墳群出土の埴輪と須恵器の胎土分析の結果を掲載したが、その中で、分析者の三辻利一氏は、瓦塚古墳をはじめ、二子山古墳、愛宕山古墳、鉄砲山古墳、埼玉2号古墳、山の中古墳の資料の一部がRb-Sr分布の上から大阪陶邑群に対応するとされた。大変興味のある結果である。しかし、現状では、須恵器の分析は地元産か搬入品かという二群間分析が適用されており、具体的には南比企群か大阪陶邑群かの二者択一となっているのが実状であり、さらに細かい判別が可能となるためには、我々の資料の集積と分析者との協力が必要であろう。

今回提示された瓦塚古墳出土の須恵器の中で、産地の明確な資料は1点のみである。それは第3図4の中型甕であり、外面の全面に淡黄緑色の灰釉を被り、光沢を帯びた大変美しい須恵器である。器肉がきめの細かい白っぽいものであることから、湖西地方からの搬入品とみて誤りないだろう。しかし、これは例外点な1点である。残りの須恵器もすべてが同一の窯で焼かれたものとはいえないが、全般に焼成がきわめて堅緻で、胎土も良好で、表面に黒色の自然釉の被るものを多く含んでいる点にめざましい時徴がある。このうち、黒色に仕上げる焼成技術は陶邑窯跡群でも初期の段階（TK216号窯など）にのみ認められるものであることから、年代の降る瓦塚古墳の須恵器群の多くは、陶邑産でなく、高度な焼成技術をもった在地窯にその出自を求められる可能性がある。

ところが、その窯跡は現在のところ未発見である。

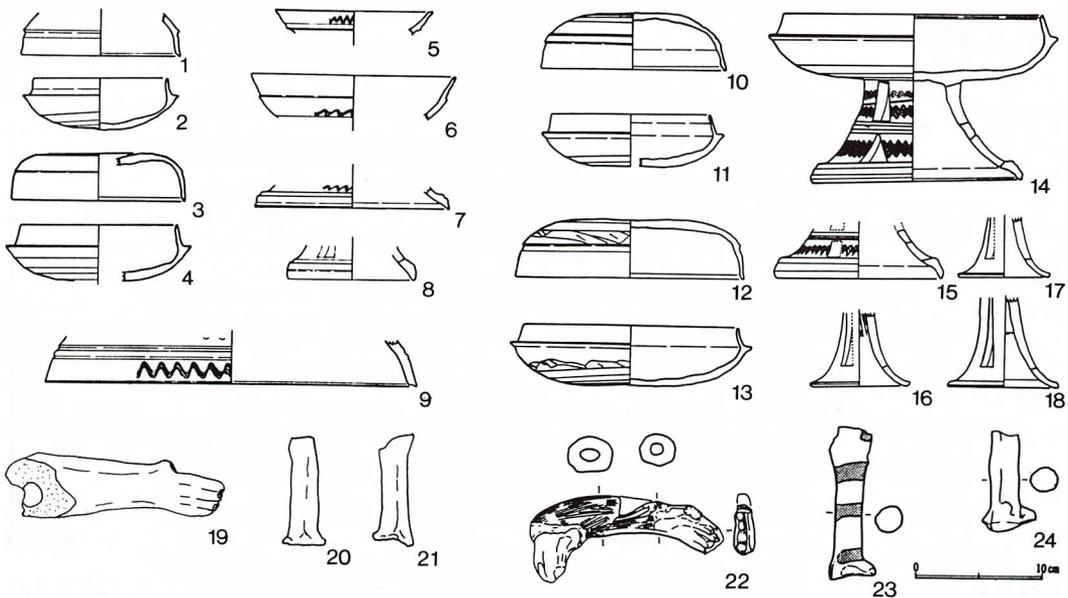
さて、前章で瓦塚古墳の須恵器は、無蓋高杯の特徴からMT15型式の中では新しい時期に併行するものと考えたが、関東地方で、この時期の須恵器窯の発掘例は埼玉県東松山市桜山窯跡が唯一知られているところである。桜山の2基の須恵器窯は様々な器種を生産しているが、6号窯では器台を8号窯では長脚一段透しの無蓋高杯を焼成している。器台は脚端部の破片資料（第9図9）であるが、端部の立ち上がる形状に瓦塚古墳例との共通性が認められ、さらに、端面に内斜する段をもつ点や

外面に櫛描波状文を巡す点、界線として凹線によって相対的に作り出した凸帯を用いている点など類似性が強い。一方、無蓋高杯（第9図16～18）は、杯部を失っているが、脚部の特徴は長脚一段三法透しで、長い脚部が裾部でラップ状に開く器形に瓦塚古墳との共通性を有しており、法量的に一致するものがあるほか、端部を丸く仕上げる点など、細かな部分でも類似性が認められる。そこで、筆者は、桜山窯からの供給の可能性を考えて、遺物を所蔵する県立歴史資料館におもむき、熱覧の機会を得た。ところが、桜山窯の製品には、①どの個体にも白色針状物質を含むことがすぐにわかる。②多孔質で吸水性が高い③色調は白っぽい淡灰色が多く、一部に青灰色のものもある。④製作は悪いものではないが、焼き上がりが軟らかい感じのものが多い。などの諸特徴が認められ、胎土、焼成の面で相違があることが知られた。

酒井清治氏は、最近の研究で、埼玉古墳群の内、稻荷山古墳の甕、二子山古墳と瓦塚古墳の器台について、在地産と推定し、鉄砲山古墳の頸部に補強凸帯をもつ大甕と、中の山古墳の須恵器の技法で作られた底部穿孔土器を、<sup>註11</sup>焼成や形態などから上野国産と推定された。もし、そうであるならば、埼玉古墳群を営んだ大首長達と上野国の大首長との政治的関係を知る上で、大変興味深い。しかし、筆者は、中の山古墳出土須恵器の中には、白色針状物質を含むものがあり、胎土分析の結果でも、南比企産とするものが多かった点で気になっている。

現状で、桜山をはじめとする南比企窯跡群か上野国産かの二者択一をせざるをえないのなら、胎土や焼成の点で桜山窯跡産とみにくいものは、上野国産と推定されるケースがあろうが、筆者は、埼玉古墳群の周辺に未知の窯跡があった可能性を考えてみたい。そう考える理由は三つある。

まず、第一に、前述のとおり、瓦塚古墳出土の須恵器器台と無蓋高杯に桜山窯との強い共通性が認められ、工人の交流または移動が推定されること。さらには、前章で、同時代の須恵器杯蓋を模倣したと考えた埼玉型土師器杯の内、大型品は口径18cm前後を計るものが多く、模倣対象として、



第9図 桜山窯跡出土須恵器・埴輪と瓦塚古墳出土埴輪 1～9 桜山6号窯出土須恵器  
10～18 桜山8号窯出土須恵器 19～21 桜山窯跡出土埴輪 22～24 瓦塚古墳出土埴輪

須恵器杯の異常な大型化をメルクマールとする桜山8号窯を介在させることで理解できること。また、中の山古墳で出土した須恵器技法の底部穿孔壺は上野産と考えなくとも、桜山窯の平底壺との関連で理解できること。

第二に、瓦塚古墳出土の須恵器器台は脚部が三段構成で、器形をはじめ、突線や波状文に古い特徴を備えている。これに対して、上野では、TK47型式併行の在地産とみられる資料で既に四段構成となり、さらにMT15型式併行の前二子古墳例では、杯部が丸みを失い、直線的に開くなどの在地化が認められ、此彼の間には大きな差が認められること。

第三に、埼玉古墳群では、奥の山古墳と瓦塚古墳において、胎土中に白色針状物質を含む埴輪が相当量認められ、人物埴輪の製作技法の上でも、腕の中空木芯技法と指の粘土紐による個別製作手法、美豆良の下端に突起を付ける点など（第9図22～24）の共通性から、桜山埴輪窯からの供給とみられる点である。<sup>註13</sup>

以上の理由から、瓦塚古墳出土の供献土器は、桜山窯の影響を強く受けた未知の窯での焼成の可能性がある。また、その候補地は埼玉古墳群周辺の台地が考えられる。その根拠は、酒井氏も指摘しているように、瓦塚古墳の須恵器器台の胎土や焼成からみて、丘陵ではなく底台地上で生産された可能性のあること。埼玉古墳群への大量の埴輪の供給を果したと考えられる生出塚埴輪窯跡群が、少なくとも、この時期には成立していて、大宮台地に地下式の本格的な窖窯を築窯し、焼成技術も極めて高いことにある。敢言するならば、巨大な生出塚窯跡群の一角に、将来、この未知の窯が発見される可能性も考えている。埼玉古墳群では、最後の前方後円墳とみられる中の山古墳でも、黒色光沢仕上げの製品が多数出土していることから、その須恵器窯は、少なくとも6世紀末ないし7世紀初頭まで継続的な生産が行われたものとみてよいであろう。

ところで、第二の理由とした、瓦塚古墳古墳の器台については、もう少し説明が必要であろう。はたして、伝世を考えなくていいのかという問題についてである。熊谷市鎧塚古墳では墳丘上の二箇所から墓前祭祀跡が発見され、それぞれ須恵器高杯形器台（第5図4・5）が出土している。<sup>註14</sup>両者には多少時間差があるが、共に脚部が二段構成の大変古い特徴を備えており、伽耶系とみられている。少なくとも陶邑ならTK208型式より古く、初期須恵器の様相を呈している。ところが、第二次祭祀に伴う無蓋高杯はTK47型式併行とみられ、周堀の底部に群馬県榛名山噴出火山灰が堆積していることから、古墳の実年代は5世紀末と推定される。この年代観は、円筒埴輪に二次調整ヨコハケを全く伴わず、埼玉稲荷山古墳や横塚山古墳よりも降るという見解から補強されるだろう。

器台と築造年代とのギャップを埋めるために、器台の伝世を考える研究者があり、さらに、搬入品か在地産かでも意見が分かれている。筆者は、一回性をもつ供献土器の中でも、特に、日常生活で使用されず、葬事に使用される器台に伝世を考える必要はないと考えており、在地産との見方に魅力を感じる。器台形土器の出土例は、埼玉県内では、埼玉古墳群の二子山古墳、瓦塚古墳、熊谷市鎧塚古墳、川越市牛塚古墳、神川町東猿見堂遺跡、岡部町六段田37号住居跡の計6遺跡8例と少ない。恐らく器台は限られた首長層の葬祭時のみの製作で、ひん度が極端に低く、畿内及びその周辺とは大きく異なる状況にあったと思われる。そのために、伝統的なスタイルが保たれて製作されつづける原因となったのではあるまいか。鎧塚古墳の例と同じく、瓦塚古墳の例も、そう理解したい。

## 5. 結 語

今回、瓦塚古墳の造り出しから出土した供献土器を提示し、検討を加えた結果、無蓋高杯はMT15型式併行期の新しい時期の所産と考えられた。また、器台と無蓋高杯は東松山市桜山窯跡との類似性が確認されたが、胎土や焼成の相違から、桜山窯から供給されたものではなく、埼玉古墳群の周辺に未知の窯が存在する可能性を指摘した。その窯は、桜山の工人の移動なしには理解しえないものである。

弥生時代以来、独自の文化圏を形成し、四世紀以降、前方後方墳や前方後円墳をはじめとする首長墓の綿々たる造営をみた比企地方は、自律的な発展を遂げた政治的小地域圏とみられる。これに対して、埼玉古墳群周辺は、新開地の感が強く、稲荷山古墳は5世紀後半のある時期に突然出現した。その墳丘の巨大さと、金錯銘鉄剣の内容から、埼玉の首長は比企地方の首長よりも、はるかに大きな権力と異なった出自をもっていたように思われる。筆者は日頃から、埼玉の大首長の版図のひろがりがいかにほどのものであったのかに興味を抱いてきたし、比企地方との関係はどうであったのか手がかりを求めてきた。

ところで、比企地方は窯業の上でも先進地であり、諏訪山33号墳の円筒埴輪が示すように、5世紀の中葉に近い時期に既に窖窯を築いて、須恵質の製品を焼成してきた。このことから、6世紀前半の桜山窯以前を埋める古い須恵器窯も存在していた可能性が容易に考えられる。興味深いのは、桜山の埴輪窯から埼玉古墳群への埴輪の供給が行われていた事実である。埴輪の生産が首長権の下で管理・運営されていたとみれば、より大きな政治的勢力への埴輪の供給は、貢納的意味合いを帯びたものであったろう。比企の地域首長が埼玉の大首長の支配の下にとり込まれ、重層的な地域支配にあたるようになったことを示す可能性がある。かつてふれたことがあるように、比企地方では6世紀に入ると帆立貝式に近い小型の前方後円墳しか築かれなくなる<sup>註15</sup>。この間の事情を示すものと評価されよう。今回、埼玉古墳群周辺に築かれたと推定した未知の須恵器窯の桜山窯との強い共通性は、おそらく、工人を貢納した結果によるものであろう。埼玉の大首長は埼玉古墳群の築造に伴う円筒埴輪の大量需要から、地理的により近接した生出塚に巨大な窯跡群を設置したが、やはり埴輪製作技法の上で桜山埴輪窯の影響を受けており、全く別個の存在ではない。6世紀後半には、生出塚窯の生産能力は最高潮に達し、供給範囲も、北足立、南北埼玉、比企に及び、小地域の埴輪窯は操業を停止し、埴輪の再分配権は専ら、埼玉の大首長の手に帰したと思われる。

さて、瓦塚古墳の築造年代については、MT15型式の新しい時期としたが、もう少し手続きを踏まなければなるまい。桜山6号窯と8号窯は、報告者によれば、前者が陶邑Ⅱ型式第1～2段階、後者がⅡ型式第2段階が中心で一部第3段階に入る可能性もあるとして、6世紀第2四半期前半と同第2四半期後半をあてている<sup>註16</sup>。これには酒井氏も賛意を表している。須恵器に実年代を与えるキーポイントは極めて限られるが、田辺昭三氏の言うように岩戸山古墳が磐井の墓だとすれば、MT15型式からTK10型式への過渡期に西暦527年が与えられる。また、田辺氏は、かつてTK23型式を5世紀最後の型式としていたが、稲荷山古墳の出土須恵器がTK47型式併行とみられるに及んで、これが築

造時期を示す土器であれば、5世期末葉の年代を与えなければならなくなっている。このことから、MT15型式は、ほぼ6世紀の第1四半期を存続期間として設定していいものと思われる。ところが、桜山窯跡では8号窯で蓋杯の大型化が異常なまでに進行している点と、標準サイズの杯身の口唇部の段が不明瞭な点など、在地化が顕著であり、MT15型式そのものの年代より下降するとみられる。筆者は6号窯をMT15型式の新しい時期、8号窯をTK10型式の古い時期と判断し、6世紀第1四半期の後半と6世紀第2四半期の前半をあてたいと思う。瓦塚古墳の年代は、一応、桜山8号窯との対比で捉えておきたい。

最後に、造り出しについて一言ふれておきたい。瓦塚古墳の造り出しは、墳丘の西側くびれ部より若干前方に寄った位置にあり、幅8m、奥行6.4m（計測は共に下場）の方形に突出している。昭和57年度には、この先端部が調査されており、ロームを削り残した低く平坦な施設と把握されていた。しかし、今回の調査では、造り出しの付け根付近では旧表土上にローム土主体の盛り土が行われており、傾斜面となっていることが知られた。このことから、造り出しは、当初、全体が傾斜をもって作られたが、先端部が後世、削平されたと理解した方がよいように思われる。注意されるのは、造り出し上方の墳丘にコンタのふくらみが連続してみられることであり、造り出しの傾斜面は一定角度で鞍部まで続いているものと推測される。造り出しが単なる平坦な張り出し部でなく、立体的なスロープとして作られていることは、機能を考える上で重要であろう。瓦塚古墳の場合、外堀に堀り残したブリッジが、この造り出しの延長線上にあるが、このことは偶然ではないだろう。

古墳の築造にあたっては、周堀の掘削によって土を得、これをマウンドに盛り上げる工程が繰り返されるが、最後まで、周堀を掘り残した通路を確保しておかないと不自由である。それは墳丘が完成した段階で、埋葬主体部を構成する材料を運ぶ必要があるし、窮極は、柩の搬入に支障をきたすであろう。恐らく、その時点までは、内堀にもブリッジがあって、造り出しに取り付いていて、最終的に削り取られたものと推測される。このような点を考慮すると、造り出しの第一義的な機能は、柩の搬入路であったと推定される。

それでは、造り出し上と、周囲の堀内から土器類がまとまって出土する事実は何を物語っているのだろうか。造り出しが斜面をなしている以上、ここに人が集まって儀礼を行うことは不可能であっただろう。そこで、手がかりとなるのは、西側の中堤上に集中して配置された人物埴輪群像である。ここで詳細に述べる紙数はないので報告書を参照してもらおうとして、その内容は、歌舞音曲の表示を中心にしていたことから、殯りの様子を示したものと理解された。殯りの場では、また神人共食の段階で飲食が行われたことが想像されるが、事実、埼玉古墳群の稻荷山古墳では小壺を両手で捧げる女子の腕が出土しているし、杯や壺を持つ女子像の例は枚挙にいとまがない。瓦塚古墳と異なって一重堀の場合、井辺八幡山古墳のように人物埴輪群が配置され、この他に、供献土器が据え置かれるので、あたかも、造り出した上で殯りが執行されたと思込みがちである。しかし、瓦塚古墳の例からは、殯りが古墳以外の場所で執行され、その際に飲食に供された器が運ばれて、最後に造り出し部に置かれた可能性がますます濃厚になった感がある。瓦塚古墳では依存状態が悪く、はっきりしなかったが、井辺八幡山古墳の大甕の類は底部が破碎されていた。今日に残る門口で茶碗を割る儀礼に通じて興味深い。

造り出しには、第二義的に、残りて用いた飲食器を廃棄する場としての機能があり、そうすることによって、古墳を礼拝するものにも、葬祭の完了を示すことができたのであろう。飲食器の廃棄は、おそらく、造り出しを極が通過した直後に行われたものと推測している。造り出しの意義については、今後の課題として、いずれ稿を改めたい。

なお、本稿を草するにあたっては、酒井清治氏より懇篤なる御指導、御助言を得ました。記して感謝いたします。

註

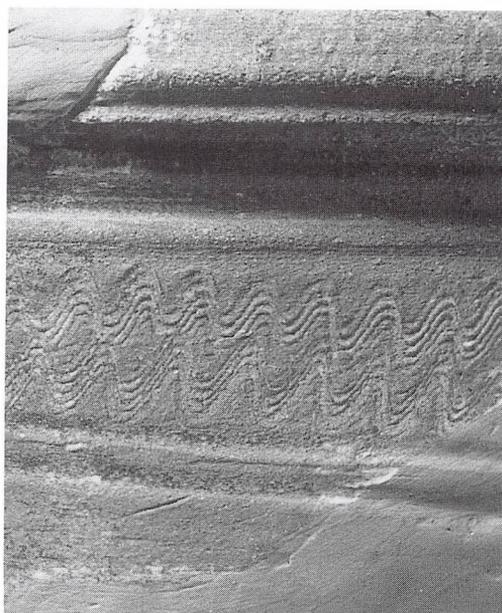
- 1 田辺昭三『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ 1966
  - 2 川上邦彦『市尾墓山古墳』橿原考古学研究所、広陵町教育委員会 1989
  - 3 A類の杯部とB類の脚部を兼具したものをC類としておきたい。
  - 4 木下亘「大和における6世紀の須恵器概観」『斑鳩藤ノ木古墳概報』橿原考古学研究所 1989
  - 5 註1文献
  - 6 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981
  - 7 中村浩『陶邑Ⅲ』大阪文化財センター 1978
  - 8 註1文献
  - 9 斎藤国夫『小針遺跡発掘調査報告書』B地区 行田市教育委員会 1980
  - 10 さらに小分類するならば、外反度の低いものと、口縁部が長く外反度の強いものを分けるべきであろう。
  - 11 酒井清治「古墳時代の須恵器生産の開始と展開—埼玉を中心として」『研究紀要』第11号 埼玉県立資料館 1989
  - 12 桜山8号窯の須恵器杯蓋のうち、つまみの付かないものの平均口径は18.1cmである。小針10号住居址出土の須恵器杯蓋は白色針状物質を含まないので、桜山8号窯の影響を受けた別の窯の製品と考えられる。
  - 13 若松良一『埼玉古墳群発掘調査報告書』第7集 奥の山古墳・中の山古墳・瓦塚古墳 埼玉県教育委員会1989
  - 14 寺社下博『鎧塚古墳』熊谷市教育委員会 1981
  - 15 若松良一・山川守男・金子彰男『諏訪山33号墳の研究』私家版 1987
  - 16 水村孝行「須恵器窯跡の操業年代について」『桜山窯跡群』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1982
  - 17 若松良一「形象埴輪群の配置復原について」『埼玉古墳群発掘調査報告書』第4集 埼玉県教育委員会 1986
  - 18 森浩一『井辺八幡山古墳』同志社大学文学部文学科 1972
- 挿図引用文献（註に既出のものを除く）
- 1 三県シンポジウム『東国における古式須恵器をめぐる諸問題』千曲川水系古代文化研究所 1987
  - 2 埋蔵文化財研究会『古代の対外交渉』 1989
  - 3 東海埋蔵文化財研究会『断夫山古墳とその時代』 1989
  - 4 三県シンポジウム『東日本における横穴式石室の受容』群馬県考古学研究所 1989
  - 5 奈良県教育委員会『大和二塚古墳』 1962
  - 6 大阪市立美術館『富木車塚古墳』 1960
  - 7 奈良国立博物館『富雄丸山古墳・西宮山古墳の遺物』 1980



瓦塚古墳出土須恵器器台



瓦塚古墳出土須恵器無蓋高杯



器台の櫛描き波状文